ハイジンの行方

――江戸川乱歩「二癈人」論

出口　歩

1　はじめに

江戸川乱歩の第四作「二癈人」（『新青年』一九二四年六月）は、ある温泉場で出会った井原と斎藤というふたりの男が互いの懐旧談を語り合う場面から始まる。「青島役」[1]で砲弾の破片を受けて「無慙に傷ついた顔面」となった斎藤は、自らの戦地体験を「実戦談」として語り、「二十年」もの長い歳月をひっそり「若隠居」として生きてきた井原は、そのきっかけを「懺悔話」と表現する。そこには、戦争で傷ついた身体を「実戦談」として語る斎藤と、戦争に行けなかった身体を「懺悔話」として語る井原が対照的に描かれている。この作品にはあらかじめ、過酷な現実をくぐり抜けてきた男の語りと、現実から逃避してひっそりと生きてきた男の語りが交錯する仕掛けが用意されているのである。

作品の前半は、斎藤の「実戦談」に刺激された井原が意を決して「懺悔話」を語りはじめる様子を描いている。

かつて東京で学生生活を送っていた井原は、自分が知らぬ間に下宿で気焔をはいたことを木村という友人から知らされる。また、ある朝目がさめると他人の懐中時計が枕もとに置かれているといった不可解な出来事も起こる。木村は井原に夢遊病を指摘し、気の毒そうな表情を見せる。生まれつき「神経病み」に悩まされ、進級が二年遅れていた井原はその言葉を真に受け、夢遊病に関する書物を読み

漁ったり、親許に長い手紙を書いて相談したりする。

そんな折、下宿の老主人が夜間にフランネルの襟巻で絞め殺され、手提金庫から多額の債権や株券が盗まれるという事件が起こる。事件の翌日、目をさました井原の部屋にはなぜか風呂敷包みが置かれており、そのなかからは盗まれた債権や株券が発見される。さらに、現場に残された数少ない手掛りであった「一枚のよごれたハンカチ」は、のちに井原のものだと判明する。自首して警察での取調べを受けた井原は未決囚として収監されるが、最初に夢遊病を指摘した木村が「学友を代表して熱心に運動してくれた」ことで「無罪の判決」を言い渡され、郷里に連れ戻されることになる。「二癈人」の前半は、「一生を棒にふってしまった」井原の独白によって進行していく。

しかし、井原の「懺悔話」が佳境を迎えるにつれて、それまで聞き手に徹していた斎藤の態度がにわかに変化し、事件の経緯に憶測を差し挟むようになる。こうして、自身を夢遊病者だと思い込んでいた井原の認識は物語の後半で揺らぎはじめる。ひとつひとつの出来事を冷静に分析していく斎藤の語りに促された井原は、自分自身の浅はかさに思いをめぐらすとともに、本当の意味で「一生を棒にふってしまった」原因は自分自身にあったのかもしれないという事実に戦慄する。

それは、「二癈人」を読み進めてきた読者の認識にも揺らぎを与える。井原の「懺悔話」の誤謬が露わになり、すべては完全犯罪を目論んだ木村の策略だったという可能性が高まってくることで、読者は事件の経緯を逆算して考えることを強いられるのである。

さらに重要なのは、知り合ったばかりの斎藤にたいして井原が抱いていた「前世の約束」であるかのような既視感が気味悪さへと変わっていくのと並行して、井原の記憶語りを促す斎藤の問いかけが、その現場に居合わせていたかのような再現性をともないはじめることである。斎藤は、夢遊病にとり憑かれた井原の動向をくわしく観察し、井原以上に井原のことを知っているかのような語り口をとるようになる。これは、得体の知れないものとの遭遇ではなく、初めて出遭ったと思い込んでいた相手が接近してくるにつれて既知のものへと変貌していくような恐怖をともなう語りである。物語は、親友だと思っていた木村こそが自分を犯罪者に仕立て上げた張本人であったかもしれないという疑惑と、いま「無慙に傷ついた顔面」で目の前に対峙している斎藤と名乗る男が木村自身ではないかという疑惑を同時に喚起させながら終局へと向かう。

ラストシーンで「まっさお」になった井原の顔色に気づいた斎藤は、「なにごとかをおそれるようにうなだれ」て、「逃げるように」部屋を出ていく。残された井原は、自分は夢遊病者でも犯罪者でもなく、ただ木村に騙されていただけなのかもしれないという事実を突きつけられ、「込み上げてくる忿怒をじっとおさえつけ」ながら自分のおろかさを直視する。詳しくは後述するが、「二癈人」の最大の見せ場が、このラストシーンにおけるさまざまな可能性の提示にあることは間違いないだろう。殺人事件の真犯人が木村である可能性も、斎藤と木村が同一人物である可能性も、作品の語り手はすべて「あり得るもの」として読者に提示し、事の真相を明らかにしようとしない。これによって、物語のなかの「二人の癈人」は謎に絡めとられていくことになる。

「二銭銅貨」（『新青年』一九二三年四月）でデビューして以来、初期の乱歩作品では、ふたりの男が互いの知恵を絞りながら競争的な関係のなかで推理をはたらかせていく手法が常態化していたが、「二癈人」の場合は、事件の解決よりも、作品世界に読者を引き込み、うす気味悪さを与えることに主眼が置かれている。犯人は誰なのか、事件はどのようなトリックで達成されたのか、といった謎解きよりも、人間そのもののおぞましさやそれがもたらす恐怖を表現しようとしている。そこでは、「人間椅子」（『苦楽』一九二五年一一月）や「芋虫」（『新青年』一九二九年一月に「悪夢」として発表したものを改題）といった後年の怪奇小説につながる試みがなされているといえる。

また、「二癈人」に凝縮された〈夢遊病者による殺人〉、〈戦争で破壊された身体〉というモチーフが「夢遊病者の死」（『苦楽』一九二五年七月に「夢遊病者彦太郎の死」として発表したものを改題）と「芋虫」にふりわけられ、それぞれ独自の世界認識へと発展していることを考えると、「二癈人」は乱歩の作家的方法意識にひとつの転機をもたらした作品であるともいえる。

実際、乱歩はこの作品ついて、

> 「二癈人」の最初の思いつきは、夢遊病者を使ったあり来りの探偵小説の裏を行くことだった。つまり「夢遊病者の犯罪だと思ったのがトリックで、実は夢遊病者なんていなかった」という筋である。夢遊病者製造の話である。（「あの作この作（楽屋噺）」『世界探偵小説全集　第23巻』博文館、一九二九年七月）

と回顧し、「あり来りの探偵小説の裏を行く」ことに主眼があったことを認めている。単に夢遊病者の犯罪を描くのではなく、「夢遊病者の犯罪」だと思わせることをトリックに、実際には存在していない夢遊病者を「製造」するような物語を書こうとしたと述べている[2]。彼にとって「二癈人」は、それまでの探偵小説を完全に反転させるかたちで読者を驚かせようとする野心作だったのである。

だが、これまでの乱歩研究史において「二癈人」が単独の作品として論じられたことはない。初期短篇小説の傾向を述べたり、夢遊病というアイディアを解説したりする言説は少なくないが[3]、「二癈人」の世界を精緻に読み解き、作品論として完結させた研究は管見の限り存在していない。

そこで本稿では、「二癈人」がどのように書かれているのかという観点から作品の言説を分析する。井原と斎藤の対話を軸に、それを包み込むように描写される温泉場の場景、室内の小道具、井原のなかに芽生えた疑念が肥大化したのちに作品の収束部で破裂するストーリー展開、そしてこの作品のタイトル「二癈人」の表記に関する解釈を試みる。作品を同時代の文脈に位置づけつつ、作品の語られ方そのものに焦点を当て、背筋が寒くなるような恐怖を読者に与えようとする語り手の戦略を明らかにする。

2　いかに描くか

作品世界に足を踏み入れる前に、乱歩が「二癈人」を執筆する以前の段階で夢遊病がどのように認識されていたのかを検証しておく。この作品の三年前に刊行された、中村古峡『変態心理学講義録　第一篇　変態心理講義』（日本変態心理学会、一九二一年）において、夢遊病は以下のように概説されている。

> これは運動機能の自働的活動であって、睡眠から惹起された一種の精神分裂と見ることが出来る。これには、睡眠中に寝言を発する程度の極めて単純なものから、或は所々を駆け廻ったり、時には重大な犯罪を行う程度の最も複雑な行為を為すものに至るまで、種々雑多の階段がある。

同書は、当時の日本における心理学の先端的研究成果のひとつである。ここでは「時には重大な犯罪を行う」可能性があると指摘されており、「二癈人」に通じる問題が提起されている。

この実例が、同じく中村古峡の『精神衛生講話　第二冊ヒステリーの療法』（主婦之友社、一九三二年三月）に見られる。同書には、一九一八（大正七）年九月に熊本県の農村で起こった事実として「ヒステリー性夢遊病中の殺人」が紹介されている。この事件は、深夜就寝中に夫が突然起き上がり、同じ蚊帳で寝ていた妻を殺傷したというもので、夫は「妻と一緒に寝たことまでは記憶にあるが、目がさめたら悲惨なことになっていた。自分がいつどんな理由で事件を起こしたか思い出せない」と供述している。

当時、このような夢遊病者は心神喪失者の範疇に括られ、一九〇八（明治四一）年に施行された刑法第三九条「心神喪失者の行為は、処罰しない」（第一項）、「心神衰弱者の行為は、その刑を減軽する」（第二項）の適用対象とされた。ただし、大審院が心神喪失の定義を明確にするのは一九三一年以降であり[4]、「二癈人」が発表された一九二四年時点では明確な基準が定まっていなかった。つまり、乱歩は心神喪失に関する法的解釈が定まっていないことを逆手にとり、夢遊病者とされた男が自分の知らないあいだに殺人事件の犯人とされ、心神喪失を理由にその刑を減軽される過程までを描き切っているのである。それは心理学と法学における最新の知見を見事に援用したアイディアであったといえる。

また、「二癈人」には同時代の社会的背景を反映するモチーフとして傷痍軍人の問題が含まれている。さきにも述べたとおり、このモチーフはのちに「芋虫」へと引き継がれる。発売禁止処分を受けたことを起点に、執筆動機や時代背景から論じられることが多い「芋虫」であるが、発想の源泉としては「二癈人」がそれに先んじており、この作品の内容から読み取るべき問題も多いはずである。

鳥羽耕史が「傷痍軍人――小川未明「汽車奇談」「村へ帰った傷兵」」（石川巧・川口隆行編『戦争を〈読む〉』ひつじ書房、二〇一三年三月）のなかで

> 戦闘などで負傷した軍人は、古くは廃兵、一九三一年以降には傷痍軍人と呼ばれた。もちろん一八九四～九五年の日清戦争をはじめ、戦争のたびに負傷者が出るのは当然のことだった。しかし、とりわけ多くの死傷者を出した一九〇四～〇五年の日露戦争後にこの問題は顕在化し、二年後の一九〇七年には彼らを収容する廃兵院が開設されるに至った。（中略）使えなくなった兵隊としての「廃兵」から、やがて癒える傷を負った軍人としての「傷痍軍人」への名称変更に象徴される

ように、増加する傷痍軍人を治療して戦場に送り、あるいは社会復帰をさせること、そうでなくても手厚く保護することが、国力を下げず、厭戦気分を高めないために必要だったのである。

と述べているとおり、日本で傷痍軍人が社会問題になるのは、爆弾によって多くの兵士が死傷した日露戦争以後のことである。日露戦争後に多数の傷病兵が顕在化したことで傷病兵保護が喫緊の課題となり、一九〇六（明治三九）年四月には廃兵院法が、一九一七（大正六）年には軍事救護法がそれぞれ制定公布されている。

「二癈人」を読むうえで特に重要なのは、作品の発表時にようやく定着しつつあったと思われる軍事救護法である。吉富滋『軍事援護制度の実際』（山海堂出版部、一九三八年一一月）が、「欧州大戦の勃発するや我国も之に参加して相当の兵員を動かしたが、殊に戦後の経済事情の急激な変化に伴って、傷病兵及び遺族家族は勿論、下士官兵の入営応召等に依って生活困難を来たす者が著しく増加したので、政府は大正六年七月、法律第一号を以て「軍事救護法」を制定公布し、翌七年一月一日より之を実施することとなった」と記すように、この法律は、戦死者の遺族および傷病兵へのさまざまな救護策をまとめたものであった。また、かつて「廃兵」と呼ばれていた人々が「傷病兵」あるいは「傷痍軍人」と呼ばれるようになるのはこの法律の施行後である。廃棄された兵士という意味にあたる「廃兵」という言葉が、傷を受けて療養している兵士、名誉の傷を負った兵士を想起させる「傷病兵」や「傷痍軍人」へと変更されていく契機としても、軍事救護法は大きな役割を果たしている。こちらも詳しくは後述するが、「二癈人」の「癈」という文字に含まれる廃人のイメージは、同時代の法制度が塗り替えようとしていた忌まわしさ、おぞましさを刻印しているという点で極めて象徴的な意味をもっているといえるだろう。

「二癈人」には、この軍事救護法の恩恵が如実に記されている。斎藤が温泉場を訪ねる目的は戦争で傷ついた身体を癒すことであるが、彼が温泉場に滞在してのんびりできたのは、軍事救護法の保護優遇制度に増加恩給と鉄道運賃の負担軽減が含まれていたことによる[5]。斎藤は、傷痍軍人であるからこそ鉄道を利用して湯治のために温泉場に向かい、そこで「十日ばかり」を悠々と過ごすことができたのである。

「二癈人」の着想としてもうひとつ重要なのは、舞台とな

る温泉場が「実世間というものから遠く切り離された世界」、すなわち「実世間」から排斥された「癈人」たちが棲息する空間として設定されていることである。たとえば、「二癈人」から一〇年後に発表された「石榴」（『中央公論』一九三四年九月）は、ふたりの男が温泉場で初めて顔を合わせ、ひとけのない場所で語り合う点、一方の推理にたいしてもう一方がそれを上回る謎解きをしてみせる点で「二癈人」と類似した構造をもっているが、この作品の舞台も温泉場である。「石榴」の冒頭は、「これを書いているのは昭和――年の秋の初めであるが、その同じ年の夏、つまりつい一月ばかり前まで、私は信濃の山奥に在るSという温泉へ、独りで避暑に出かけていた。S温泉は信越線のY駅から、私設電車に乗って、その終点から又二時間程ガタガタの乗合自動車に揺られなければならないような、極く極く辺鄙な場所にあって、……」という描写がなされており、そこが「辺鄙な場所」であることが殊更に強調されている。両作における温泉場は、単なる癒しや娯楽の施設ではなく、世間の賑わいから遠ざけられた空間として表象されているのである。

では、乱歩はなぜふたりの男が語り合う舞台としての温泉場に執着したのだろうか。考えられるのは、そこを「湯治客も少なく、ひっそりとして物音ひとつしな」い場所にする必然性があったということである。通常の都市生活者の場合、周囲と隔絶された環境のなかで静かに語り合うことは難しい。どちらかの自宅を語り合いの場として設定しても、そこには当事者の生活や嗜好と密接に結びつく物品が溢れており、互いを「異常な緊張をもって相対」させるには不都合である。とりわけ、斎藤のような身辺不詳の男がゆきずりの相手と長時間にわたって会話をつづけるシチュエーションを設けるのは極めて困難であろう。

それに加えて、温泉場の日常にはこれといったイベントもなければ時間で管理されたスケジュールも存在しない。温泉場の井原と斎藤は、世間の喧騒から隔絶されるだけでなく、彼らを支配する時間の制約からも逃れることができる。この作品は、舞台背景を可能な限り捨象し、無機質な部屋のなかで必要最低限の小道具を駆使しながら語られることで読者の想像力が喚起される仕組みになっているのである。そうした無機質さをもっているがゆえに、互いのことをよく知らない人間同士のさりげない会話のなかで誤認があぶり出されていくさま、あるいは会話の進行とともに恐怖がにじり寄ってくるような気配を演出することができる。乱歩は、夢遊病や傷痍軍人といったモチーフを用いて

同時代との接点を模索しつつ、そうした文脈を遮断する仕掛けとして温泉場を舞台に据えるなど、読者に恐怖や気味悪さを感じさせるための入念な工夫をしているのである。

3 「癈人」の空間と表象

斎藤の「実戦談」が終わったあと、語り手は井原の内面を以下のように描写する。

「この男は戦争のお蔭で一生台無しにしてしまった。お互に癈人なんだ。が、この男はまだ名誉という気休めがある。しかしおれには……」／井原氏はまたしても心の古傷に触れてヒヤリとした。そして肉体の古傷に悩んでいる斎藤氏などは、まだまだ仕合わせだと思った。

ここで井原は、「お互」を無益な「癈人」だと認識しているが、同じ「癈人」であっても、そこには大きな違いがある。それは、斎藤に「名誉という気休め」が与えられていること、そして、彼の「古傷」は「肉体」の問題に過ぎず、精神の健康は保たれていることである。そのうえで井原は「こんどはひとつ私の懺悔話を聞いていただきましょうか。勇ましい戦争のお話のあとで、少し陰気すぎるかも知れませんが」と切り出し、「生れつき非常な神経病み」、「不幸な身の上」などの表現を用いて自身の体験を語る。外的要因によって「癈人」になった斎藤には名誉が与えられているが、生まれつきの内的要因によって「癈人」になった自分には何もない。そこで井原は、自虐的に語ることで〝かわいそうな自分〟を演出するのである。犯罪者の自覚をもちながらも、〝かわいそうな自分〟を語ることで「癈人」としての自身を再確認し、惨めな存在として肯定されたいのである。

そもそも、井原は出会って十日ほどの斎藤にたいする印象を「前世の約束」、「こんなに親しくなる」、「遊び友だちでもあったのではあるまいか」などと表現している。「初対面」であるはずの相手に運命すら感じているのである。また、「見覚えがあるような気がした」斎藤の顔が間もなく「確かにどこかで見たことがある」ものへと変化している点からも、井原が斎藤に過度な親近感を抱いていたことが読み取れる。

一方の斎藤は、「なにごとかを待ち構えるよう」な素振りを見せつつ、「すぐ、さりげなく眼を伏せ」る。これは明らかに、相手がこれから語ろうとする内容をあらかじめ把握

しているにもかかわらず、それを悟られまいとする態度である。斎藤の「無慙に傷ついた顔面」は仮面として機能しはじめるのである。

そんな斎藤の推理によって「懺悔話」は「懺悔話」でなくなっていく。斎藤は一連の推理について「懺悔話を伺って、あまりお気の毒に思ったものですから、つい、われを忘れて変な理窟を考え出してしまった」と話すが、推理を聞いた井原は呆然とし、「まっさお」になってしまう。親しみを感じていた相手によって淡々と展開される、仮面の内側が見え隠れするような推理が井原に大きな打撃を与えたのである。しかし斎藤の推理も語り手による語りも、夢遊病者による殺人事件の真相を明らかにすることはなく、そこには複数の可能性を含んだ〈謎〉だけが残る。井原から一方向的に提示された「懺悔話」は、斎藤の推理と語りによって双方向的な、二者があいまいに絡み合う不変の〈謎〉へと姿を変えるのである。

温泉場の機能については前述のとおりだが、この作品では、その内側にもうひとつの空間が存在している。それはふたりが静かに対峙する「八畳の座敷」である。この部屋には「おだやかな冬の日光が障子いっぱいにひろがって」おり、外部のノイズはいっさい遮断されている。語り手は、室内の濃密な空気を和らげる緩衝道具のように「茶」「煙草」「囲碁」を配置し、会話の端々にそれらを登場させる。

冒頭の記述を除いて、「茶」が登場するのは、井原の語りが始まる場面にある「お茶を入れかえて一服すると、井原氏はいかにも意気ごんだようにこんなことをいった」という一節と、「懺悔話」が終わったときに、井原が「下らないお話で、さぞ御退屈でしたろう。さあ、熱いのを一つ入れましょう」と言いながら茶道具を引き寄せる場面である。作品世界における井原の語りは、「茶」を入れて一服したところから始まり、「茶」を新しく入れかえようとするところで終わっている。ここで重要なのは、後者において、井原が茶道具を引き寄せはするものの実際に「茶」を入れかえてはいないことである。

「もうこのごろでは煩悶もしなくなりましたよ。ハハハハハ」と力なく笑う井原は、ここで自身の「懺悔話」が完結したと思って「茶」を入れかえようとする。井原にとって「茶」を入れかえることは話題を転換するためのきっかけであり、「茶」は装置として機能しているのである。だが、ここで斎藤が「伺ってみればあなたもやっぱり不幸な方なんですね」と口を挟み、行為は阻止される。こうして井原が「茶」を入れかえるタイミングを逃すことによって、

斎藤は語る立場に接近する。井原は「茶」を入れかえるという行為をもって斎藤に立場を明け渡すのではなく、「懺悔話」の延長において語りの主導権を奪われるのである。このとき入れかえられなかった「茶」は、「二十年」ものあいだ夢遊病という観念にとり憑かれたまま自発的な行為から遠ざかっていた井原の存在すら象徴している。

斎藤は、井原の回想に耳を傾けているあいだ、くり返し「煙草」を手にしている。「煙草」は自分のペースで自由に吸ったり吸わなかったりすることができる。相手との関係において話題を調整する際に有効な「茶」にたいして、「煙草」は自分の意志を明確にする装置としての機能を果たすのである。たとえば、井原が「懺悔話」を始める場面で斎藤は「いや、さぞかし面白いお話が伺えることでしょう。そういえば、きょうはなんだか昔を思い出すような日よりではありませんか」と言ってそれを促す。だが、井原が「或る恐ろしい事実」に言及しようとした途端、語り手は「ここまで話すと、井原氏はなぜかかすかに身震いした。斎藤氏は吸いさしの巻煙草を火鉢に突き差して、熱心に聞きはじめた」という一節を挿入する。

「煙草」を「火鉢に突き差し」たことで、斎藤は自由に口を動かせるようになる。それは熱心に聞く態勢をとることであると同時に、相手が語る世界に積極的に関与していくことを示す仕草でもある。実際、井原が「懺悔話」を語り終えたときの斎藤は、「そうですか。ちょっと拝見したところは結構な御身分のようでも、伺ってみればあなたもやっぱり不幸な方なんですね」と労ったあと、「意味ありげな溜息」をつく。相手に「意味ありげな溜息」を見せたうえで、「ですが、その夢遊病のほうは、すっかりおなおりなすったのですか」と問いかける。「煙草」を「火鉢に突き差し」た斎藤は、まず「溜息」で相手の領域への侵入を試み、自由に動くようになった口で井原の語りにたいする自身の解釈、推理を加えはじめるのである。受動と能動を切り替えるスイッチとしての「煙草」を握っている斎藤は、あらかじめ井原にたいして優位な立場を保持しているといえるだろう。

双方の機能を踏まえたうえで冒頭場面に戻ってみると、それは次のような一文で始まっている。

二人は湯からあがって、一局囲んだあとを煙草にして、渋い煎茶をすすりながら、いつものようにポツリポツリと世間話を取りかわしていた。

語り手は、固有名詞を記さず「二人」という呼称を用いている。「煙草」と「茶」も同時に描いているが、話が「取りかわ」されているように、そこに語る／聞く、問う／答えるといった力関係は存在していない。「二人」は、「おだやかな冬の日光」が射し込む部屋のなかで、他愛のない「世間話」に興じているだけである。そして、ここに「煙草」「茶」とともにさりげなく描写されているのが「囲碁」である。囲碁は対局する二者が手を打ち合うことで碁石が並べられていく競技だが、戦争の擬似行為として駒を衝突させる将棋とは異なり、互いの手を利用し合うような相互性がある。碁盤の上で白と黒の碁石が不規則に混ざり合うことで、そこにひとつの世界が誕生する。井原と斎藤ではなく「二人」と表記される所以はそこにある。

向かい合う井原と斎藤のあいだに井原の最初の一手として提示される「懺悔話」も同様である。はじめは無言の応戦をしていた斎藤が口を開くことによって、それまでの語り手と聞き手の境界があいまいになり、「懺悔話」は碁盤の上に白と黒が混在するような〈謎〉として浮遊する。「囲碁」は「懺悔話」が〈謎〉に変化することを予感させる装置でありながら、「二人」が複雑に絡み合う光景の寓意なのである。

だとすれば、「二癈人」というタイトルもまたひとつの寓意として読むことができるのではないだろうか。作品の冒頭における「二人」は、いかにもおだやかな雰囲気のなかで「囲碁」を愉しみ、「煙草」や「茶」を口にしていた。だが、井原の「懺悔話」が佳境を迎え、斎藤が「煙草」を離して身を乗り出した瞬間から、ふたりの関係は明かされない事件の真相を媒介とするものになっていく。「二人」が、あいだの「癈」という文字でつながっている状況を表題とすることによって、この作品が「二人の癈人」の物語であること、対話からひとつの真相が明らかになるような生産的な物語ではなく、「二人の癈人」が閉じられた空間のなかで絡み合うように棲息するさまを描いたものであることを暗に示しているのではないだろうか。

斎藤が話をやめたあとの室内には、ふたりの廃人と、「懺悔話」から姿を変えた〈謎〉だけが残るが、「二癈人」の三文字は井原と斎藤と〈謎〉、それぞれのあり方を体現している。向かい合う廃人とそのあいだに浮遊する〈謎〉、という位置関係から、「二癈人」の「二」と「人」は廃人に、「癈」は〈謎〉に対応すると考えて、一人二役を演じる斎藤に「二」、夢遊病者として殺人を犯した可能性を否定される井原に廃人と区別される常人の意味で「人」を当てはめると、

「二／癈／人」の文字列から「斎藤／〈謎〉／井原」という構図が見えてくるのである。

ここで注目したいのが「癈」という文字の字面である。この作品が『新青年』に発表された際のタイトルの表記は「二癈人」となっていたが、一九三一年に出た平凡社版『江戸川乱歩全集』では、ヤマイダレの「癈」がマダレの「廢」に変更され、「二廢人」となる。また、文庫本などに所収される際は「二廃人」と表記されることもあった。しかし、乱歩自身が編集に関わり、「印刷に廻す前に、全作品を通読し、私流の漢字遣い、仮名遣いに改め」[6]、「なるべく新規則に従って校訂した」生前最後の全集、桃源社版『江戸川乱歩全集』（一九六二年）では、表記が再び「二癈人」に戻されている。乱歩は「癈」という文字に強くこだわり、明確な意図をもってこの文字を用いたのである。

白川静『字通』（平凡社、一九九六年）によれば、「廢」は「廃」の異体字であるとともに「癈」に通じるものであり、仮に「二癈人」が「二廢人」、「二廃人」と表記されても作品の解釈に支障はないはずである。したがって、乱歩が「癈」という文字に執着した理由は、意味よりも字面そのものにあったと考えられる。

同書を見ると、「广」は家や小屋の意味、「疒」は病の意味をもつとされている。当然、「癈」の文字は作品に病的なイメージをもたらすことになる。また、ヤマイダレのなかにある「發」という文字は字画が多いうえに非常に込み入った形をしている。視覚的な印象でいえば、白と黒の碁石が混ざり合う「囲碁」と同様、複雑に絡み合った模様のように見える。「發」を細分化すると、「癶」が室内を覆う屋根を表し、その下に存在する「弓」と「殳」がふたりの廃人を表すように見える。このうち、戦争で傷ついた身体をもつ斎藤は武器を表す「弓」につながり、先が膨らんだ棒状のものを手に持ってうつ、たたく、こわすことなどを意味する「殳」は「一生を棒にふってしまった」男として登場する井原を想起させる。つまり、「癈」という文字は、温泉場の一室でくんずほぐれつの絡み合いをつづける井原と斎藤というふたりの人間が、ともにヤマイダレのなかに押し込められている様子を表しているのである。「癶」の屋根はふたりを外界から隔絶するはたらきをする一方で、彼らを狭い領域に封じ込めるはたらきもしている。心身それぞれに傷を負った「二人」の「癈人」は、こうして外界との接点を失い、閉ざされた空間のなかで身悶えし合っているのである。

乱歩は、このような作為をもって「癈」の文字を採用し

た。いったんマダレの「廢」に変更されたあと、あえて初出の表記に戻すことで自身の狙いを徹底させた。そこには、筋や構成だけでなく、作品の語り方や表記のレベルにおいても細心の注意を払いつづけた彼の嗜好が表れているといえるだろう。

4　語りが導くもの

作品の序盤において「実戦談」と「懺悔話」を交錯させながら展開されていた語りは、のちに斎藤の優位性をうかがわせるようになり、その斎藤からの刺激によって井原は自身の誤認を意識しはじめるが、「二癈人」では、井原の内的変化が外界の場景描写と連動するかたちになっている。この作品における場景描写はそれほど多くないが、さりげなく挿入された言葉が一種の舞台効果となって読者を誘導するのである。

A　おだやかな冬の日光が障子いっぱいにひろがって、八畳の座敷をほかほかと暖めていた。（中略）夢のようにのどかな冬の温泉場の午後であった。／（中略）かすかに鶯の遠音が、話の合の手のように聞こえてきたりした。

B　正月の書き入れ時もとくに過ぎた温泉場は、湯治客も少なく、ひっそりとして物音ひとつしなかった。小鳥の鳴き声ももう聞こえてはこなかった。

C　冬の日は暮れるにはやく、障子の日影も薄れて、部屋の中にはうそ寒い空気がただよい出していた。

Aの時点では「おだやかな」、「のどかな」といった表現が用いられ、部屋のなかは「ほかほか」と暖まっている。こうした描写から、読者はふたりの会話が和やかに進行していくことを期待するはずである。しかし、井原が「懺悔話」を進めるうちに周囲は「ひっそり」し（B）、それまでなかった緊張感が漂いはじめる。重要なのは、それが「私の一生涯をめちゃめちゃにしてしまうような、とり返しのつかぬ悲劇が持ち上がったのです」という井原の言葉の直後に挿入されていることである。「ひっそりとし」た空気と「身動きもしないで謹聴してい」る斎藤の様子が二重写しのように表現されることで、読者はそこにただならぬ緊張感を見出すのである。ここでほんの数行だけ挟み込まれる場景描写は、井原の長い独白に裂け目を入れ、物語世界にのめり込んでしまいそうになっていた読者を第三者の視点

に引き戻す効果をもつ。固唾を呑む緊張感と傍観者の位置に留まる安息を切り替えながら進行する語りによって、「二癈人」の世界は遠近の奥行きを獲得するのである。

だが、この作品における場景描写がより大きな効果を発揮するのはCの一節である。ここで語り手は、日が暮れかかった部屋の様子を「うそ寒い空気がただよい出していた」と表現する。そこには得体の知れない何かが静かににじり寄ってくるような恐怖感がある。乱歩自身が『探偵小説名作全集1』(河出書房、一九五六年七月)の「解説」において「おっとりとした会話小説の中に、夢遊病者の抱く恐怖を描こうとしたものである」と語っているように、作品執筆の根幹に「恐怖」をいかに描くかという点があったことは間違いないが、その「恐怖」が直接語られるのではなく場景描写によって演出されていることは看過できない。目に見えないもの、具体的でない出来事を恐怖の対象として描くために、乱歩は場景描写を巧妙に利用しているのである。

同じことはAとBにおける鳥の鳴き声にもいえる。AからBへの移行は空気の変化であると同時に、さっきまで聞こえていた鳥の鳴き声が聞こえなくなった、というように表現される。それは読者に、〝さっきまであったはずのものが無くなった〟という感覚を与え、のちに井原の「懺悔話」が事実から誤謬へと転換することの予兆として機能する。「いかにも意気ごんだように」始まる井原の「懺悔話」は、斎藤の疑問提示によって次第に勢いを失い、最後はすっかり意気消沈してしまうわけだが、鳥の鳴き声は井原の心象と結びつくように現われ、消えていくのである。

では、この作品における恐怖とはどのようなものなのか。ひとつは、斎藤の語りによって明らかになる木村の奸智の恐ろしさである。斎藤はしばしば木村の心理を代弁するかのように「あなたという信じやすい、気の弱い人を夢遊病者に仕立てて、ひと狂言書く」、「少なくとも木村氏はそう信じていたことでしょう」、「あなたの今のような告白を聞いたなら、さぞかし後悔したことでしょう」といった言い回しをする。そして、井原のために「熱心に運動してくれた」木村こそが真の犯人であり、彼は自分の殺人を隠蔽するために井原を夢遊病者に仕立てて濡れ衣を着せたのではないか、という推理をすることで井原を驚愕させる。事実だとすれば当事者しか知り得ない犯行の動機を語るのである。井原はこのとき、最後まで自分を救済するために動いてくれた親友こそが自分の人生を台無しにした張本人だったという結論を突きつけられる。夢遊病者の自分が起

こした犯罪によって「一生を棒にふってしまった」井原にとって、木村は記憶のなかのかけがえのない存在になっていたはずであるが、斎藤の推理によって木村は牙をむく。「二癈人」における第一の恐怖はその変貌にある。

とはいえ、こうした裏切りは日常生活でしばしば起こり得ることであり、冷静な思考力があれば罠にかからずに済んだかもしれないという意味では想定可能な恐怖である。「二癈人」においてそれ以上に恐ろしいのは、「二十年」前を最後に記憶のなかの人となった木村ではなく、いま「無慙に傷ついた顔面」で目の前に座り、親しく話しかけてくる斎藤の存在である。

特に斎藤こと木村の巧妙さが際立つのは、自身の推理を展開するにあたって「もし、もしですよ。その木村という人がそんな立場にあったと仮定しますならば」、「もし彼があなたの今のような告白を聞いたなら」といった仮定法の表現を多用しつつ、井原の記憶とぴったり照合する事実を重ねるような語り口をしている点である。ここでの「もし」には、有無を言わせぬ圧力が含まれているのである。井原がかつて遭遇した事件、および井原と木村のあいだに交わされた会話を間近で見聞きしていた者しか知り得ない情報に基づいて推理をしていることを考えれば、斎藤が木村である可能性は極めて高い。もちろん、井原の周辺にいた木村以外の人間が斎藤という名で木村の行為を代弁している可能性も排除できないが、そのような部外者が井原のもとを訪ねてくる理由はどこにもない。このことから、事件後「二十年」もの時間を経て再び井原の前に現われた男はかつて親友だった木村であり、彼が斎藤という架空の人物になりすまして自身の策略を井原に教えている、という筋道が立つ。ここで初めて読みの整合性が保たれるのである。

ただし、この解釈は必然的にひとつの謎を生み出す。それは、なぜ斎藤こと木村はわざわざ井原のもとを訪ねて自分が犯した罪を告白しようとしたのか、彼の目的は何だったのか、ということである。井原の内面では、〝いま目の前にいる相手こそがかつての木村だとは認めたくない〟という思いが極限まで膨らむが、温泉場の密室空間にいる彼がそれを拒むことはできない。「二癈人」におけるさらなる恐怖は、斎藤こと木村の不明確な目的のもと、謎が謎のまま取り残されるような状況でありながらも、それを拒絶する術をもたないという矛盾に由来するのである。

5　結

斎藤の推理のあとの井原は、斎藤を「見送ろうともしな

かった」すなわち「動かなかった」ものとして語られる。しかし、ここでの井原は「まっさお」になったのち長い時間が経ってもなお「元の場所にすわったまま」で、その「全力」は「込み上げてくる忿怒をじっとおさえつけて」「思慮を失うまいと」するために消費される。〝かわいそうな自分〟に支えられてきた自己が崩壊した井原は「動かなかった」というより「動けなかった」のである。そして「心の古傷」から解放された次には「おろかさ」の自覚が迫ってくる。「動けなかった」井原の隠居は、罪を犯したことから〝おろかな自分〟にたいする嫌悪へと理由を変えてつづくのである。

一方の斎藤は、井原の夢遊病と犯罪を暗に否定しながら、真犯人は木村――だった自分――であることをちらつかせ、周到な語り口によって井原に恐怖を刻み込んだ。彼の告白は清算にも償いにもならない。それどころか被害者の前で自白するという点では自らを危険にさらすものである。しかし戦争によって傷ついた廃人は、リスクを冒してでも過去の行ないを告白することで、木村としての自身をどこかに残しておきたかったのではないだろうか。

のちに「逃げるように帰って行った」斎藤であるが、「動けなかった」井原に「讃美」とともに刻み込まれた木村の影は井原のなかで生きつづける。〝おろかな自分〟との対峙を強いられた井原が動けなかった以上、木村は井原に内包されるものとして室内にとどまるのである。

「お互に癈人」のふたりが語り合う「二／癈人」として始まった「二癈人」は、斎藤の推理を経て「斎藤／〈謎〉／井原」となり、「二」と「人」であった廃人たちは最終的に病と屋根のもとで「癈」に集約される。彼らは真相の気づきと告白によって呪縛から解放されるわけではなく、あくまで「癈」のなかで生きつづけるのである。

※「二癈人」の引用は『江戸川乱歩全集7』（桃源社、一九六二年）に、「二癈人」を除く江戸川乱歩作品および作者言説の引用は光文社文庫版『江戸川乱歩全集』に拠る。なお、「二癈人」の引用における傍点、傍線は執筆者による。また、引用は適宜現代仮名遣いに改めた。

【注】

1　青島は中国山東省東部、山東半島南部の都市。第一次世界大戦中、日本は連合国軍の一員としてここを攻撃、占領した。板谷敏彦『日本人のための第一次世界大戦史　世界はなぜ戦争に突入したのか』（毎日新聞出版、二〇一七年一〇月）によれば、日本陸軍は、火

力（砲撃）による敵の火砲制圧と歩兵部隊の壕を掘りながらの斬進による「力押し」の戦法を採った。

2　「類別トリック集成」（『宝石』一九五三年九月・一〇月）の夢遊病の項目には「好例はコリンズの「月長石」。（中略）私の読んだものでは、ヘンリー・ジェームス・フォーマンの長篇「罪」（一九二四）、サックス・ローマーの短篇「楽屋の二悲劇」など。私自身の「夢遊病者の死」もこの項に属する」とある。「二癈人」は、夢遊病者による犯罪の話というよりも、やはり「夢遊病者製造の話」としての認識が強かったといえよう。

3　中島河太郎は『江戸川乱歩全集1　屋根裏の散歩者』（講談社、一九六九年）の「作品解題」で「「一枚の切符」で最初に裏返しトリックを用い、こんどは夢遊病者を使ったありふれた探偵小説の裏を行くことを狙ったのである。／温泉場で口をききあった男の二十年前の懐旧談から、相手が一応謎を解いてみせ、さらにひとひねりした本篇は好評を博した」と述べている。

4　一九三一年、大審院は「心神喪失」を「心神喪失とは、精神の障害によって事物の是非善悪を弁別する能力、またはその弁別に従って行動する能力のない状態をいい、心神耗弱とは、精神の状態がまだその能力が完全に失われたとはいえないが、著しく障害された状態をいう」と定義した。

5　傷痍記章を有した軍人は「不具廃疾の程度」によって「通用期間十五日以内の国有鉄道無賃乗車証」を請求できた（吉富滋・前出）。斎藤の場合、少なくとも毎年四回以内の利用が可能だったと思われる。

6　桃源社版全集の「あとがき」において、「「抽斗」を「引出し」（この場合は「引」の下に「き」をつけない）」、「行くに当る「いく」を、やはりゆくと読ませたいので「行く」と書く」ことなどを「自己流」の例として挙げている。

（立教大学文学部文学科日本文学専修四年）